

下種する上行菩薩こそが大聖人と拝した上人は、仏の因行果徳の妙法は大聖人の信行によって凶顕された曼荼羅を通してこそ名字即成仏をかかなえる法体となると考えられていたと思われること。二つめに熱原法難時に上人が直接大聖人から受けた教えである「未<sup>レ</sup>必須<sup>ニ</sup>モ安<sup>ニ</sup>形像舍利並余經典、唯置<sup>ニ</sup>法華經一部<sup>」</sup>（昭定二六七一）を守り貫いたこと。三つめに上人は『弟子分本尊目錄』や徳治三年四月八日の書写曼荼羅脇書に熱原法難の顛末を記されたが、上人にとって曼荼羅は広くは大聖人と全門弟の信行を追懐させ、別しては熱原法難時の大聖人と門弟の信行を追懐させる本尊であつたと思われること。四つめに下層武士と農民が多かつた上人の檀越にとつて佛像造立は費用面で困難をとまなうものであつたこと。ちなみに上人の消息に表われる錢の供養は十貫文ほど（最少百文、最多三貫文）、米の供養は一石ほど（最少二升、最多二斗・一駄。一石は当時の一貫文）。しかし上人と門弟にとつて曼荼羅は大聖人と門弟の魂であり本尊としてなにも不備不足はなかつた。貧窮であつても信仰心厚ければ授与された曼荼羅を本尊と崇めることは、法華信仰が底層の民衆に受容されるための不可欠要因の一つであつたのではなからうか。

直接間接に高木豊教授から教えをいただいたことを記して感謝の意を表したい。

## 妙宗本尊辨考（二）

——大曼荼羅御本尊をめぐる諸問題——

### 三 原 正 資

本宗の御本尊をめぐることは、①本尊の勧請様式の現状、②本尊の实体に対する認識、③本尊の授与に關して問題がある。

この観点から探ると、優陀那日輝師の本書は、大曼荼羅は「本仏ノ形像」を表現した仏本尊であると主張したものである。「当ニ知ルベシ、本尊ハ釈迦仏ナルコトヲ」（三三八頁）、「十界ノ本尊（大曼荼羅）ハ是レ所頭ノ仏体ナリ」（三三九頁）と述べている。さらに木像釈迦仏と大曼荼羅を比較して「無ニ無別、但タ名体相ト異ナル耳」「広略木画ノ異ナル耳」といい、木像の釈迦は「名ニ親しく」「実ニ疎ナリ」とコメントしている。

しかし本尊の勧請様式に關しては「真宗カトリシズム」

運動を提唱している大村英昭氏のアプローチも参考になる。「実際は立派な荘嚴をつけているわけですよ。(略) 教団というものは、そういうものを堂々と持つてくることに、教学になると、間法道場、サンガに徹しろ、ご本尊はただお名号でええんだ、というわけです」と語っている。宗教の現実を考慮せよということである。

御本尊の実体は何であろうか。多くの人は大曼荼羅には釈迦仏のリアリティ（實在・現実・真実）を感じられないと言つ。それに対し、逆説的に、実はおマンガラこそが「実ニ親シイ」（三四六頁）すなわち釈迦仏の眞のリアリティを示したものと和上は考えた。「当今ノ機縁、実ニ釈迦ニ依テ得道ス。而ニ却テ釈迦ノ実身ヲ識ス。迹ニ迷テ本ヲ亡ズ」（三四〇頁）「滅後ノ有縁ハ曼荼羅ノ圖像ニ依テ本師ノ本形ヲ拝シ己心ノ妙法ヲ知ル」（三三〇頁）と述べている。では、その釈迦仏とはいかなるものか。「本有常住ノ浄土、久遠無始ノ実報国界ハ其形ケダシ大宝蓮華広大妙台ノ如シ。其中央ニ無始無終常住不滅ノ仏有テ住存ス。是ノ仏ノ一身一念能ク大宝蓮華広大法界ヲ成就シ、一身一念円ニ散テ広大法界ニ周偏シテ無量ノ国界ヲ成就シ莊嚴セリ。即チ名ケテ実報無礙ノ浄土ト為ス」（三三〇頁）と述べている。

このような考えはこれまで原始的な宗教観念としてのアニミズムと見られた。しかし「科学が神秘を解明してきてるといふか、逆に保証してきている」（大村氏）今、私は大曼荼羅を①世界は一つの生命体―エコロジックの世界観―、②「宇宙の大いなる実体」―現代物理学と法華経―、③臨死体験―死後の靈山往詣は本当にあるのか―等の視点から再把握していくべきであると思う。

## 守護国家論に見る「日蓮が法門」の

### 其本的信心と思想について

――課題としての生と死――その二――

米 田 淳 雄

日蓮聖人の宗教を宗祖御自称の「日蓮が法門」（九三三頁、一五九〇頁、一九一―頁昭定）と呼び、宗教の最大課題である生と死の問いと答えを「守護国家論」に聞かんとしたものである。

1、「守護国家論」は五大部と共に極めて重要な遺文